

高市は話疲れたのか胸のポケットをさぐってタバコを取り出し火を点けた。目を細め窓外の春霞にけむる山容をながめる。役場内は静かで、人声もない。

高市は再び話はじめた。

「亀井さんは運が悪かった。戦後しばらく村を離れとりました。アメリカの軍政部が松山をひきあげた昭和の二十四年に村にもどってきたそうです」

「やはり戦犯に問われたのですか」

秀次郎の胸に鈍く差し込むものがある。

高市はタバコの火を灰皿に押しつけた。

「それがそうではなかったのに、本人が村を出てしもうたので、容疑者ということになってしもうたのが本当のところですよ」

高市は新しいタバコに火を点けた。

軍政部の調査の核心は、亀井正利が炭焼き小屋で搭乗員を発見したとき、果たして搭乗員が本当に死亡していたのかどうかという点に絞られていた。ところがだれか不明なのだが、警防団の一人が新聞記事にそった証言をし、昭和二十一年の二月、亀井に軍政部への出頭命令が出た。亀井は拒否し村を出て、行方不明となったのである。

前年の十二月にはBC級戦犯を裁く横浜軍事法廷が開かれ、戦争犯罪人への断罪がはじまっていた。亀井に出頭命令が出された月には、マッカーサーの裁定で山下奉文元大将の絞首刑がマニラで執行されている。このような状況下で出頭命令を受けた亀井の恐怖心は想像に余りあるものがある。

不時着した搭乗員を村人が謀殺したともとられかねないこの出来事は、幸いにも警察と警防団それに憲兵隊にも信用のできる記録が残されており、戦争犯罪の容疑に問われる者は出なかった。

高市俊造の話聞き、秀次郎は「戦犯事件」のスタンプの謎が解ける思いがした。

亀井の妻の手紙から推察すれば、村役場は行方をくらませた亀井を事務的に戦争犯罪容疑者にしたこととなる。そしてそこには村の作為が感じられる。山狩りをした警防団に戦争犯罪の容疑が及ぶのをさけるため亀井が利用されたのではないか。公職追放の嵐が吹き荒れた時代には、同じ様なことが数多くあったといわれている。ともあれ、公職追放指令の手続きとして「戦犯事件」のスタンプが亀井家の戸籍表に押され続けたことだけは確かであった。

だが戦後も十年をこえて、まだそのようなスタンプが押されていたというのは、どう考えてもおかしなことであった。かつて政江がこの問題を調査したとき、戦犯関係者の間ではこうしたスタンプの存在すら知らなかったのだ。秀次郎には山奥の閉ざされた山村だからこそおこり得ることのように思えた。

秀次郎は高市にこのことを尋ねたかったがさすがに面と向かっては切り出しにくい。それで亀井夫妻の消息を確かめた。夫妻は共に他界していた。

昭和三十五年に林産課に勤めていた高市は佐礼山でもずっと奥に住んでいた亀井の家へちよくちよく出かける機会があり、家族のことまでよく知っていた。夫妻は十年ほど前に相次いで亡くなり、家は空き家になった。三人いた子供たちはみんな都会へ出て行ったままだという。

高市は一服し、志村に訊いてきた。

「おたくは兵隊の経験がおありですか」

「はい」

「どちらへ」

「最後はマーシャル諸島でした」

「マーシャルというと、太平洋の……」

「ええ、フィリピンよりまだ南東の方です」

ヤルートというほどのこともなく、元少佐はわかりやすくフィリピンを出した。

高市はいった。

「戦争に行ったことのないわたしにはわからんことですが、国同士の戦いが終わったからそれで何もかも終わりというわけにはいかんもんですな」

戦後処理問題のことらしかった。

が、秀次郎は自分のことを凶星された気がした。五十年経ったから「もう赦してもよい」とかれにも思われぬのだ。

予定以上に時間が過ぎていた。

十分な収穫があった。

亀井が住んでいた家へ行くのか、と高市は訊いた。バスで三十分かかるという。

秀次郎は亀井の子供たちの所在の調査を高市に頼み役場を後にした。

昼過ぎに山奥へ行くバスに乗った。

二車線だった道路は、短い家並みをぬけるとすぐ一本の坂道へ変わった。バスは段々畑の斜面を左右へゆるゆる旋回しながら登っていく。途中、停車場が三つあった。降りる客はいたが乗る者はいない。

ずいぶん上へ来たようで、山間に沈む家並が遠く下の方へ遠のいている。四国山地のまだ冬景色の山肌が目前に迫ったころ、バスは畑の上へ出ていた。

板がこいの大きなバスの車庫と、その背後にそびえる二本のイチイこずえの梢が秀次郎の目に入って来た。停車場から人の高さほどの石組みを上がった雑木林の手前に農家が三軒並んでいる。

終点で降りたのは秀次郎だけである。

運転手に聞くと、すぐ上の農家は三軒とも空き家だが林の奥には集落があり、そこには営林署の社宅もあるという。

秀次郎は石段をゆっくり上がって、すぐ手前の農家の庭先に立った。

周囲の景色に見覚えがある。

建物に近づき、玄関の柱にまだぶらさがっている郵便受けの名札を確かめた。うすく亀井と書か

れている。見上げると、萱^{かや}ぶきの屋根に雑草が生え、軒先のあちこちにかけてられた蜘蛛の巣が春の日差しに光っている。

秀次郎は落葉を踏みしめながら庭をぐるぐる歩いた。それから、石垣の上の小道を通って隣の二軒の空き家の前を行ったり来たりした。さらに元の場所に戻ると、また庭を円を描くように何周となく歩いた。

ひどく静かだった。

歩きながら、政江が喜んでいる気がした。

よい供養ができたではないか。

秀次郎はほこらの参拝では決して味わったことのない思いに酔い、なお休むことなく歩き続けた。



挿絵 (E. Hakooka)